

No.30

スキデルスキーのケインズ

小峯 敦

2004年3月

謝辞

本稿の作成・発表にあたって、次の便宜を得たので感謝したい(順不同)。

- (1) 本稿は日本科学技術振興会(文部科学省)・科学研究費補助金(基盤C、「ベヴァリッジの経済思想」、課題番号 15530132、2003-2004)の助成を得た。
- (2) 日本語版序文の原文入手には、若田部昌澄氏(早稲田大学)に協力を仰いだ。
- (3) 一部の参照文献について、篠田英実氏(新潟大学大学院)に助けを借りた。

Key Words: スキデルスキー、ケインズ、伝記、ハロッド、モグリッジ
経済政策、戦間期

JEL Classification (Journal of Economic Literature)

(a)main: B31 History of Thought: Individuals

B Methodology and History of Economic Thought

(b)sub: N14 Europe: 1913-71, N1 Macroeconomics and Monetary
Economics; Growth and Fluctuations

N Economic History

凡例

- (1) 訳文のあるものは参照しているが、原則として訳は変更してある。
- (2) ... は原文の省略を示す。また[]は筆者による挿入を示す。
- (3) Harrod (1982/1951)、初版は 1951 年だが、1982 年版を用いている。または 1951 年に執筆されたが、1982 年に出版された。
- (4) Hicks (1977: 訳 166)、訳本のみを参照した。

2004.3.5

スキデルスキーのケインズ

小峯 敦

- 1.はじめに
- 2.執筆の動機
- 3.思考様式
- 4.副題の違い
- 5.おわりに

1.はじめに

執筆契約から数えれば¹ちょうど 30 年後。2000 年にケインズの新しい伝記は完結した。この伝記を経済政策の側面のみから評するのは、予想以上に難しい。なぜなら、思想・理論・政策の不可分性こそがスキデルスキーのケインズ論の主訴²とも主張できるからである。ケインズの著作は中心的な専門的議論が歴史的・政治的枠組みの中に配置され、政策提言で締めくくられる。そして歴史観・専門的知識・実践への官僚的関心が、ケインズの心で融合していた（1, 275）。しかし以下では、できる限り政策論に引きつけながら、伝記全体を個別論点³に陥るのではなく 評価したい。

それゆえ、彼の伝記執筆の動機に沿った論評を心がける。その動機は 2 つあ

¹ Skidelsky (2000, 97)。この寄稿は出版直後のインタビュー記事である。

² 特に 1940 年代の政策論を、1930 年代の理論および 1920 年代以来の思想に結び付ける主張は説得的である。特に流動性選好説から国際清算同盟の低利子・資本制御・信用調整へ、総需要・総供給分析から景気循環を緩和する財政政策、私的企業の社会化から財政の安定化へ、弾力性悲観主義から固定為替の好みへ（3, xiv）など。

³ 偉大な達成という点ではどの評者も一致している。欠点として挙げられるのは、『一般理論』以外の著作や期待を重視しすぎ、経済学説を正しく捉えていない（ケンブリッジ学派の扱いや、特に貨幣理論の発展）、ホワイトの描き方が極端、英米交渉の大局を誤っている、終章に重厚なまとめが欠けている、オックスフォードマンゆえにケンブリッジの捉え方は誤り等がある。

る。1つはハロッドへの異議申し立てである⁴。もう1つは特に初期の知性と感性に関する信条が、後期の経済学の業績を理解する上で不可欠であるという信念である（日本語版序文）。

2. 執筆の動機

第1の目的はほぼ達せられた。ハロッドの伝記は一言にすればヴィクトリア王朝風であり、ケインズを実際よりも穏やかで温厚な人物に仕立て（1, xiii）模範人として人々を鼓舞させる意図が隠されていた（1, ）。その動機はケインズ経済学を（特にアメリカに）売り込むことであった。しかしその隠蔽工作は、スキデルスキーによって完璧に暴かれてしまった。同性愛の隠匿は無理からぬこととしても、経済学を使って「大衆投資家をたぶらかす」という語句（1905.11）を引用から省いたこと（1, 165）、良心的徴兵拒否の事実をさらに明らかにしたこと（1, 320）、1919年以前は投機を行っていないとするハロッドの判断（大蔵省在職中のインサイダー取引を暗示させないため）を覆したこと⁵（1, 288）、など例は数多にある。ただしハロッドの判断は時代に沿うものであり（未亡人たちの存在、ケインズ経済学の隆盛期）、スキデルスキー自身の思考遍歴⁶も問われることになるだろう。

第2の問題は非常に微妙である。スキデルスキーの立場は極めて一貫しており、この意味では清々しい。つまり「ハーヴェイロードの既定概念」よりも「ケンブリッジ文化の既定概念」が重要なのである（1, 26）。前者はイギリス帝国の繁栄を前提として、政府が知的貴族に主導されることである。これはケインズの公的義務の側面を強く描き出す。後者は倫理学者ムーアと政治哲学者パークに強く影響されたケインズの大学時代を指し、審美・愛智という私的生活を優先する信条を示す。

この第2問題の主張について、2種類のコメントを付けたい。

第1に、この一貫した立場が他の立脚点 特に政策に応用される自由主義

⁴ 1945年に保守党候補として立候補したハロッドは、ケインズを過激と見ていた（3, 497）。

⁵ ただしスキデルスキーもケインズが、大蔵省の内部情報を使って投機したという問題に回答しているわけではない。

⁶ 著者の家系は1917年と1929年に共産主義と資本主義の暴君ぶりに洗礼を浴びたロシア亡命者である。Skidelsky（1994/1993, ）。現在は貴族に列せられ、ケインズの旧居（ティルトン）を買い取って生活している。

的改良主義 に対する目を曇らせる可能性である。2つの例を取ろう。まずスキデルスキーは繰り返し（1, 166; 1, 228-9; 2, 66）特に1914年以前ではケインズは政治や経済ではなく⁷、ムーアに強く導かれ、知識や愛に耽溺していたとやや単純化して主張する。このためクラークの主張 ケインズの思想は20世紀初頭の新自由主義に大きく左右された（O'Donnell ed. 1991, 137）

を完全に退ける（1, 223; 241）。確かにスキデルスキーの描く私的生活への拘泥は非常に説得的である。しかし同時に、（例えば）ウェッブ夫妻への傾注⁸（1909, 1911, 1913）を始め、労働組合・フェビアン協会での講演（1909）など（Moggridge 1992, 190）は、通り一遍ではないケインズの社会改革情熱を物語らないだろうか。関税改革運動（1903）が政治・経済を勉強させるきっかけと指摘し（1, 121）自由党の政権奪取に歓喜したと一方で指摘しながら（1, 166）改革への熱意を自由貿易（旧来の自由主義）への賛成だけに限定する（1, 241）のは狭すぎる。次の例は「地上の楽園」計画（ベヴァリッジ報告）についてである。ここでもスキデルスキーは福祉国家論の中で、社会保障論に対するケインズの関与を最小限に見ている（3, 264）。この見解はバーク政策論⁹

遠い将来の壮大な計画（例：社会主義の理想）を嫌悪 の摂取がケインズの生涯を覆っているという主張から導かれる。確かにベヴァリッジ案の構造には何も影響を与えず、資金調達の面のみを側面支持したという判断は正しい。しかしこれだけではケインズがなぜこの計画に「ひどく感激し」「非常に重要かつ雄大な建設的改革である」(Keynes, 1980, 204)と喜んだか、適切な判定ができない。さらにスキデルスキー自らはケインズのバーク政策論への批判も見逃していない。それがまさに理性による裁量的な政策改良主義である¹⁰。この側面は公的義務の滋養であり、ハーヴェイロードの既定概念に接近するはずである。

⁷ マーシャルと違い、経済学を社会改良の道具として使い、貧困を根絶しようという倫理的動機がない。また「厚生（政策目標）＝良きこと」と単純化するピグー（1, 210）は、これを否定するムーア～ケインズと対照的である。

⁸ ケインズは自らの失業論が、ウェッブ等の『救貧法委員会少数派報告』（1909）に源泉を持つことを認めている。

⁹ 「短期には我々はまだ生きている。生活と歴史は短期の積み重ねである」というケインズの言葉（1936）の引用は見事である（3, 33）。

¹⁰ ただしこの表現は簡略版のスキデルスキー（2001/1996, 79）に明言されているだけで、本体の3巻本には不明瞭であった。この事実もハロッド説への過度な攻撃の結果と言えるかもしれない。

スキデルスキーはケインズの基本的立場を中道¹¹the Middle Way とみなし、集産主義からも自由放任主義からも遠いとする(2, 64; 3,)。彼は集産主義を語る際に、20世紀初頭の新(=社会的)自由主義¹²を等閑視しており、かつベヴァリッジ計画を中央集権的計画という枠組みに押し込めた¹³。その一環として、フリーデンの主張 ケインズ=中央集権指向の自由主義者 も退ける(1, 241)。しかしケインズ全集 27巻から窺えるのは、単なる経済の管理化という側面だけではない。ケインズはベヴァリッジ等と会合を重ね¹⁴、戦後計画を協同して担ったのである。これは完全雇用と社会保障がお互いに他を前提として循環した時に、福祉国家という最大限の相乗効果を上げることが両者に了解されていたためであろう。この実態を無視することは、福祉国家の形成史(経済論と社会論の結合)としては不十分ではないだろうか。結局、ハロッドおよびスキデルスキーの2つの既定概念を、適切な比率で組み合わせる必要がある。

第2のコメントは、ケインズの若き日の信条がいつ・なぜ変化したか 換言すれば、なぜ政策提言という公的生活が支配的になったか について、スキデルスキーの次の説明は不十分である。「30歳が近づくとつれ、実践的・行政的・世俗的側面が大きくなった」(1, 263)。「有名で能力と義務感のある人物は、公共問題を戦前のように無視できなくなった」(2, 34)。当然に第一次世界大戦が最大の影響を与えているが、それを境にケインズの信条がどのように変化したのか、適切な引用がない。この非存在は逆に、第1に、公的義務(社会的情熱)は1914年以前には最小であるとする説を揺るがせないだろうか。実際、デービスは「良き状態であることと良き行為をすることの調和を図ることが、社会~経済的改革である」(Davis, 1994, 172)と述べ、ムーアから触発されたケインズ政策論の特徴を浮き彫りにしている。また第2に、次のようなベイトマンの説に反駁できないのではないか。彼は「ケインズ問題」(初期と後期の思想的連続性)において、断絶説をとる。つまり哲学的源泉がケインズの

¹¹ この概念は「合理性と民主主義は両立できる」(2, 63)という言い方もできる。合理性はエリート主義の共和制を指向しがちである。

¹² 利害調整の役目を国家に担わせるという立法改革、自由党の改革など。ケインズは「”新”自由主義をオックスフォード理想主義者の混乱の典型例とみなした」とあるが、スキデルスキーはその典拠を挙げていない(2, 134)。

¹³ これはむしろ Skideksky (1995) 全体の論調から窺える。

¹⁴ 両者は1940年頃から「古強者」として頻繁に会合を重ねた。

経済学を作ったのではなく、1930年から33年にかかる事象・論争（金本位離脱、戦債借換、投資家の経験、ヘンダーソンの信認・期待論）が決定的に重要であると主張する（Bateman, 1996, 124-5）。ピグー・ロバートソン・ロビンズ・ハイエクは非ケインジアンながら『戦費調達論』を激賞し¹⁵、ケインズの対米交渉を支持した。しかしヘンダーソンは悉くケインズ案に反対した。1920年代に失業救済策で協同戦線を張った両者がなぜ分裂したかを含め、ペイトマン説（慣行・規則を重視する後期ケインズ像）を含む断絶説への反論が欲しかった。

3. 思考様式

スキデルスキーの思考様式は次の3人から影響を受けている、と指摘しておくのも重要であろう¹⁶。

1人目はシュンペーターである。次の四重層を分けて考える。洞察力 vision とは分析に先立つ認識である。理論化とは洞察力を概念化することで、概念を名付け、関係を確定することである。科学的モデルとはそのモデルで用いる変数・概念以外を排除する作業である。最後に方法がある（2, 539-40）。スキデルスキーはシュンペーターの概念を補足し、特に理論化とモデルを区別することで、様々な論点に応えようとする。ケインズの生涯を通じた洞察力は、不確実性 希少性ではなく 下の合理的選択行動である。これを具現化した理論が『貨幣論』であり、『一般理論』であった。ヒックスの IS-LM 分析は1つのモデルである。このモデルの洞察力はケインズのそれと異なるのだが¹⁷、政策に応用できるという関心から褒めも批判もされなかった（2, 615）。スキデルスキーの仮定は、ケインズの洞察力がほとんど生涯に渡って変化せず、かつ理論は政策に応用されるべく何回か激変し、数学モデルはその著作には合わない

¹⁵ 繰り延べ払いによる反インフレ政策については、ケインズの政策貢献としてもっと注目されるべきであろう。スキデルスキーはこの点を詳しく記述し、赤字財政主義 = ケインジアンという単純化から当然に逃れている。社会保険と強制貯蓄（繰り延べ払い）を代替物とみなす視点（3, 62）は、福祉国家とケインズが遠いことを示唆する点で疑問もあるが 秀逸な指摘である。

¹⁶ この3人は著者本人が挙げている人物だが（Skidelsky, 2000, 98）ここでは無意識的な影響まで合わせて考えている。

¹⁷ 貨幣需要関数に何の変数（利子率 or/and 所得）を入れるかという分類は、本質的ではない。むしろ貯蓄や投資がどのような調整変数を持つかという市場構造が、ケインズとの違いであろう。この点は美濃口（1993, 65）も参照。

ということである（方法に関しては言及がない）。この整理はケインズの理解にとって、極めて有力な四重層である。ただ一点の不满は、この分類と政策提言の位置関係を明言して欲しかったことである。

2人目はレイヨンフーブットである。その著作から「思考の連続仮説」が触発された。すなわち思想家の考えには一貫性があり、その観点から眺めると統一した概観ができるという確信である。この影響力は「ケインズ革命」という用語の広さと持続性から伺える。スキデルスキーはこの用語を国内均衡優先主義として用いたり（2, 20）、理論だけでなく政府の革命と捉えてみたり（2, 23）、貨幣賃金が粘着的なので、物価や為替こそが賃金に沿って調整されるべき（貨幣賃金削減による雇用増大の不可能性）という考えが1922年に表明されたことに用いたり（2, 132）、マクミラン委員会で政策形成としてこの用語が始まった（2, 362）としてみたりする。この用語の広範さは、いずれもモデルは言うまでもなく、理論のレベルでもその変遷は相対的に重要度が薄れ、洞察力（特に政策提言）の一貫性を際立たせる役目を果たす。ここまでは自覚的な影響力である。さらに暗黙的な波及としては、『貨幣論』の重視や、価格パラメーターの調整不良・需給の協調失敗というレイヨンフーブット好みの問題も重視される。

3人目はクラークである。彼からはケインズの理論と政治的・行政的地盤がいかにかが影響された。また前述のように、クラークの推進する「ケインズ～新自由主義連合」に逆に反発するという結果になっている。

4.副題の違い

シュンペーターはかつて、ケインズの学説はイギリスの風土に合う限りで健全であると認識した。ケインズの洞察が果たして国境を越える普遍性を持つか、という問題提起である。この問題におけるスキデルスキーの回答はつかみにくい。それは特に第3巻において顕著になる。第3巻の副題は「イギリスのための闘い」であったが、アメリカ版では「自由のための闘い」にわざわざ改められている。あるアメリカの経済学者は第3巻のスキデルスキーを徹底的に批判した¹⁸。戦時・戦後の英米金融交渉（その象徴の1つがケインズ案とホワイト案）において、両案（国）の類似性よりも異質性を暴き立てるやり方は、イギリス帝国主義的保守主義の影響下にあるという。そしてその原因はスキデルス

¹⁸ http://www.j-bradford-delong.net/Econ_Articles/Reviews/skidelsky3.html

キーが経済学者ではないため¹⁹に、両案が指向する超国家銀行による国際金融・貿易の管理²⁰という共通点を過小評価した点にあるという批判である。

スキデルスキーはこの批判を重く受け止め、アメリカ版序文でイギリス版の立場をかなり修正した。すなわち元々彼はイギリス生き残りへ闘いやケインズの愛国心を描き、アメリカ合衆国を同盟国かつ競争相手として記述する²¹意図があった。しかしアメリカ版では、英米ともに反全体主義という崇高な価値に向けて戦ったことを強調したいと手直した(3,アメリカ版, xiii)。アメリカ人を過度に不愉快にさせないという配慮²²であった。その上で、ケインズによる金融上・経済上の闘いは、チャーチルによる軍事上の闘いの前提ではあるが、同じ重要性は持たないと判断した。そしてケインズは英米同盟の範囲で、愛国者としてイギリスのために、自由と完全雇用を結びつけるために闘ったとまとめた(3,アメリカ版, xv)。ただしこの副題変更も逆にテーマをぼかしてしまうと批判されている(Ryan, 2002)。

英米版副題の違いは、見かけ以上に本質的な問題を提起してくれる。ケインズは誰のために闘ったのか。その説得術がイギリスよりもアメリカで相対的に発揮されなかったのはなぜか。この点に関する著者と評者たちの温度差は、ケインズ全体を評価する場合の着眼点まで露わにする。すなわち、ケインズが実際にどのような意図で英米交渉に望み破れたかという歴史的・主観的な側面が1つ。そしてケインズの意図した枠組みが、実際にどのような機能を世界経済で果たしたかという論理的・客観的な側面がもう1つ。無論、両者は絡み合っており、容易に解きほぐせるものではない。しかし自らの論評がどちらに力点

¹⁹ 「経済学者ではないために」という修辭句は本書にはほぼ当てはまらない。Moggridge (2002, 642) や Laidler (2001, 11) は特に貨幣理論の歴史を誤読していると断罪する。しかし、ほとんどの場合それは見解の相違(マネタリストの立場を取るか、ポストケインジアン等の立場を取るか)に還元され、経済学への無理解を示すものにはならない。

²⁰ IMF協定の第1条で、加盟国の高雇用と所得の成長が謳われている。この背景には、経済の双務主義・ブロック主義による近隣窮乏化が究極的には世界大戦をもたらしたという認識がある。

²¹ 対米交渉を扱う第3巻は圧巻である。ケインズが勝ち抜くべき交渉相手は、単にアメリカ側だけでなく、ドールトン(ケインズ・ピグーの弟子だが、労働党に親近感のあるピグーを師とし、ケインズを嫌う)を含むイギリス本国側にも存在した。

²² ただしアメリカ人は自分のみが利己心から逃れていると考えがちだ、と皮肉

を置いているのかを常に自覚する必要があるだろう。

スキデルスキーは少なくともこの点は自覚的である。彼は経済学をよく知る歴史家の立場²³から伝記を書くとはっきりと明言している (Skidelsky, 2000, 97)。これは経済学の論理を等閑視することを意味しない。むしろケインズという物語の中で、縦系 (歴史的文脈 context) と横系 (経済的論理 text) を縦横無尽に織りなすという離れ業をやったのけたのである。実はハロッドやモグリッジも2つの系を自在に走らせていた²⁴。ただしそれは経済学者の立場から、横系にやや重点が置かれていたのである。スキデルスキーはケインズを経済学者から救済し、属すべき歴史に正しく据えたと宣言した (3,)。この表明は経済学者に対する挑戦²⁵と捉えるべきでなく、上記の縦系と横系の適切な比率を再考したいという意志の表れと考えるべきだろう。

5.おわりに

まずはこの壮大なケインズ論に触れるべきである。そのためにも中断したままになっている翻訳の完遂には、学会として十分な支援体制を組むべきであろう。ケインズ論の広範な読み継がれを期待する。

(凡例)

第1巻は1992年 paperback 版(1983年初版)、第2巻は1994年 papermac 版(1992年初版)、第3巻は2000年イギリス版から引用した。また日本版序文の原文(1985年?)、第3巻のアメリカ版序文(2001年)も参照した。例えば1巻目23ページの参照は(1, 23)とした。

も書いている(3, アメリカ版, xiv)。

²³ 逆にケインズ伝にかかりきることによって、彼は狭い歴史の仕事より、世界を直接に記述したいという気持ちが強くなった。Skidelsky (1994/1993, xiii)。この意識が第3巻を含め、近年の仕事 (Skidelsky 1995 等) が集産主義の興隆としての20世紀史に結実している。

²⁴ ケインズを巡る経済理論や歴史的解釈については、ハロッドは自分の見解が修正されうると認めている。しかしケインズについての直接の知識は自分のみが伝えられると自負していた。Harrod (1982/1951,)。モグリッジの場合は私生活への深入りは避け、経済理論とその応用に集中している。Moggridge (1992, xiv)。

²⁵ ただし新しく期待されるケインズ主義を粘着的価格の説明や産出ギャップの説明だけに求めるのは(3, 507) やや期待はずれである。

(参照文献)

- Bateman, B. W. 1996. *Keynes's Uncertain Revolution*, Michigan: The University of Michigan Press.
- Brittan, S. 2000. "The Legacy of John Maynard Keynes", *Financial Times*, 23 November 2000.
- Clarke, P. 1998. *Keynesian Revolution and its Economic Consequences*, Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Davis, J. B. 1994. *Keynes's Philosophical Development*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Harrod, R. 1982/1951. *The Life of John Maynard Keynes*, Norton paperback version, New York: Norton & Company. 塩野谷九十九訳 『ケインズ伝』(改訳版) 東洋経済新報社、1967。
- Keynes, J. M. 1980. *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Volume 27, *Activities 1940-1946: Shaping the Post-war World: Employment and Commodities*, London: Macmillan.
- Laidler, D. 2001. "Skidelsky's Keynes: A Review Essay", *University of West Ontario Department of Economics Working Papers*, 20014.
- Moggridge, D. E. 1992. *Maynard Keynes: An Economist's Biography*, London: Routledge.
- Moggridge, D. E. 2002. "Skidelsky on Keynes: A Review Essay", *History of Political Economy*, 34(3), Fall 2002.
- O'Donnell, R. M. ed. 1991 *Keynes as Philosopher-Economist*, London: Macmillan.
- Ryan, A. 2002. "Keynes's Last Stand", *The New York Review of Books*, 14 March 2002.
- Skidelsky, R. 1991. "Keynes's Philosophy and Practice and Economic Policy", in *Keynes as Philosopher-Economist*, ed. R. M. O'Donnell, London: Macmillan.
- Skidelsky, R. 1994/1993. *Interests and Obsessions: Historical Essays*, papermac edition, London: Macmillan.
- Skidelsky, R. 1995. *The World after Communism: A Polemic for Our*

Times, London: Macmillan. 本田毅彦訳 『共産主義後の世界』 柏書房
2003。

Skidelsky, R. 2000. “Skidelsky on Keynes: Ideas and the World”, 97-99,
The Economist, November 25th 2000.

スキデルスキー.2001/1996. 『ケインズ』 浅野栄一訳 岩波書店。

美濃口武雄 「書評 ジョン・メイナード・ケインズ 第2巻」64-65、『學鐙』
90(10)、丸善、1993.10。

[本文 7452 字][脚注 2350 文字]